

よしひさえん

学生と住民が空き地を活用して生まれたコミュニティガーデン 2022-2024



目次

02 よしひさえんとは

03 コミュニティガーデンの作り方

①探す・考える

②育てる

③つくる

④祝う

⑤広げる

04 活動体制 / 活動メンバーの感想

15 3年間の活動年表

17 よしひさえんと屋台

19 よしひさえんの事例研究

卒業研究：多世代のネットワーク形成に向けて

修了研究：コミュニティガーデンの価値とその創出要因

これは空き地を活用したコミュニティガーデンであるよしひさえんの活動を紹介するガイドブックです。コミュニティガーデンとは、住民が協働で空き地などを緑地化し、継続的に維持・管理しながら近隣住民に開放する「みんなの庭」のことです。

2022年度から始めて2024年度も続いているこの活動の記録から、コミュニティガーデンの企画・実践を行いたい学生や教職員、研究者、地域団体に向けて、ポイントを紹介します。

コミュニティガーデンや空き地の活用に興味をもつきっかけとなり、それらの企画・実践に役立ててもらえたら嬉しいです。

重山 隼人
よしひさえん 発起人

よしひさえんとは

2020年に重要伝統的建造物群保存地区に選定された富山県吉久（以下、吉久）は、地域コミュニティの希薄化、空き地の増加に伴う生活環境の悪化といった課題があります。しかし、通りに面した空き地は、まちづくり活動を実践する上での視認性が高く、多様な使い方を許容できるため、人的ネットワーク形成の場になりえます。そこで、空き地を活用したまちづくり活動を行うことで、空き地問題を解決するだけでなく、様々なネットワーク形成につながり、新たなコミュニティの形成において有用ではないかと考えました。このような仮説に基づき、2022年度から地域住民所有の空き地を暫定的に「よしひさえん」と名付け、多世代交流を目的とした活動に着手しています。具体的には、地域住民と学生の協働によって、園芸や共食などの食をテーマとした活動や、ベンチづくりやタープの設置といった空間・環境整備に取り組んでいます。

私は、大学で建築やまちづくりを学ぶ過程で、「今、自分にできることはないのか」と考えるようになりました。そんな中、低コストで機動的な試行的取り組みを通して小さな変化を積み重ね、まちの大きな変化に繋げていく「タクティカル・アーバニズム」という概念を知りました。そこで、身近な空き地を活用しながら、地域の交流活性化に少しでも良い影響を与えることができないかと思い、卒業研究の一環として始めたのが「よしひさえん」です。

「よしひさえん」という名称には農園、公園、ご縁という3つの“えん”の意味を込めました。農園では、野菜や花を育てられる場所になってほしいという思い。公園では、誰もが気軽に自分のやりたいことを表現できるような場所になってほしいという思い。ご縁では、地域とのつながりを感じたりや新たな人の出会いが生まれやすくなる場になってほしいという思いです。始まってから3年間、これらの思いの実現に少しずつ近づいています。色々な“えん”が重なるこの小さな活動・場所が地域の暮らしに大きな影響を与えることを信じています。



コミュニティガーデンの作り方

よしひさえんを参考に、自分の地域にコミュニティガーデンをつくるための大まかな流れを紹介します。

① 探す・考える p.05

土地・仲間・予算を確保し、デザインする

身の回りで活用されていない農地や空き地を見つけたら、まずは所有者や管理者を調べて交渉。並行して一緒に協力してくれそうな仲間を見つけ、企画や場のデザインを考えてみよう。予算は民間企業や研究機関からの助成金を調べてみよう。



② 育てる p.07

畑をつくる・植える

企画・計画ができれば、畑づくり。地面が砂利やコンクリートの場合はレイズドベッドを作り、新たに土を入れよう。畑ができればみんなで種や苗を植えよう。みんなでやれば早くできるとし、共同作業を通じて結束や愛着が深まるよ。



③ つくる p.09

設備・憩いの場をつくる

畑ができれば、休めたり遊べたりする場所も欲しい。よしひさえんではベンチやテーブル、タープの支柱もDIY。コンポストやピザ窯、ブランコなども多くのコミュニティガーデンに見られるアイテムのひとつ。



④ 祝う p.11

収穫や料理や食事を一緒に楽しむ

収穫する時はみんなで祝いしよう。自分たちで育てた野菜は特別だし、みんなで味わえばもっと楽しい。よしひさえんでは、サツマイモ堀りと焼き芋づくりを一緒に行ったり、収穫した野菜でポトフを作って地域住民に振舞ったりしているよ。



⑤ 広げる p.13

活動を広げる・続ける

活動が成熟してきたら、活動を広げてみよう。畑の外に飛び越えた活動をしてみたい、地域に向けた情報発信を試してみたり。よしひさえんでは、地域で開催されている朝市に出店し、収穫した野菜を販売・提供しているよ。地域を巻き込んで、一緒に楽しみながら活動することが継続のためのポイント。

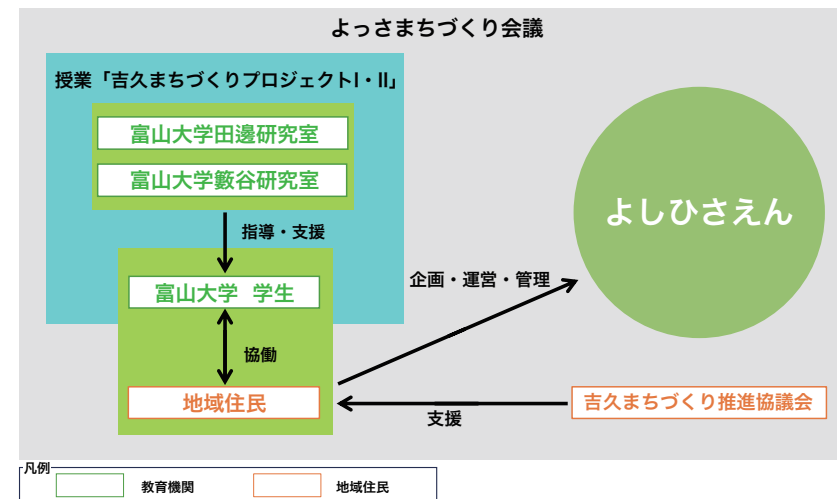


活動体制

2022年度は、卒業研究として私が主体となり企画・運営を行いました。2023年度からは住民を主体としたまちづくり活動体の形成と担い手発掘に向けた連続ワークショップ「よさまちづくり会議」と富山大学芸術文化学部の授業「吉久まちづくりプロジェクト・II」を組み合わせ実施し、授業を履修する学生と地域住民が協働して、企画・運営に取り組んでいます。2023年度は学生2名、地域住民9名の計11名、2024年度は学生3名、地域住民8名の計11名（内継続者：学生1名、地域住民7名）で協働した活動が行われました。若者から高齢の方まで一緒になって活動しています。私は学生と地域住民の仲介役としてグループワークにおけるファシリテーターや活動のお手伝いとして参加しました。

敷地は地域内で酒屋を営んでいた住民の方（2025年1月に閉店）から無償で提供いただいています。のびのびと活動ができているのは心優しい所有者のおかげです。予算は大学コンソーシアム富山の学生による地域フィールドワーク研究助成や北陸地域づくり協会の研究助成事業から確保しました。2024年度からは、これまでの活動・研究成果が評価され、高岡市からも助成を受けることができました。

2023・2024年度の体制図



活動メンバーの感想

この機会が無ければ土に触れることもなかったかもしれませんが、活動を通じて自分たちで育てた野菜が実った時は努力が形となってとても嬉しかったです。

地域の方とも沢山お話することができ、貴重な経験となりました。

今後は畑もやりながら、たまにカフェをやったり、スポーツをしたり、より幅広い活動ができる場所になったら楽しいと思います。



富山大学 芸術文化学部
3年 石原亜実さん
2023・2024年度の授業を受講し、よしひさえんの企画・運営に携わる



吉久住民 浅野芳昭さん
2022年度はイベントへの参加者としてよしひさえんに関わり、2023年度からはチームとしてよしひさえんの企画・運営に携わる

3年間、毎年進化してきて嬉しく思っています。この調子で今後も続いて行くと思うと吉久の将来が楽しみです。私は83歳で100歳時代の当事者で、その立場から感じています。

よしひさえんの活動は高齢者の生き方の一つとして役立つことは間違いないと思います。今後も進化させてもらえば嬉しいです。

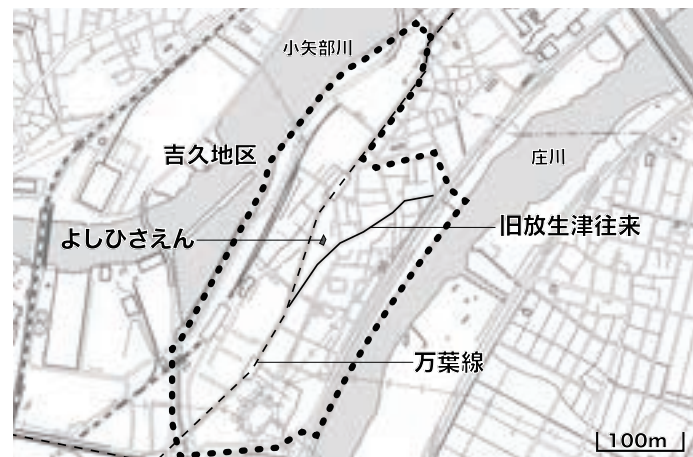
① 探す・考える

「コミュニティガーデンを行える空き地はあるのか」、まずはそこから始めました。吉久中を歩き回り、使えそうな土地をリストアップしました。私が吉久に引っ越してきたことも幸いし、地域のまちづくり団体や同じ町内の方からの協力を得ることができ、所有者との交渉をスムーズに行うことができました。

2022年度は、「食」をテーマとした世代間交流を目的とした活動を行うために、吉久に住む子育て世代にヒアリング調査を行いました。自分がやりたい活動だけでなく、地域の人も楽しめる、ニーズにあった活動のヒントを得ることができました。

2023年度からは、学生と地域住民のチーム体制になり、よっさまちづくり会議の枠組み内で活動が行われるようになりました。月一回程度の定例会やよっさまちづくり会議にて、企画や運営について話し合いました。

実際に地域を歩いたり、話を聞いたり、歴史を調べたり、色々なところに活動のヒントが隠されています。地域にもとから存在している団体やまちづくり組織と連携して活動したり、まちのニーズを把握したりすることがポイントです。



左上/よしひさえんは、かつての街道である旧放生津往来と万葉線（路面電車）が通る道路を繋ぐ住民の生活道に面している。立地条件や旧放生津往来からの視認性を有しているといった場所性、住民の活用のニーズを考慮し、この敷地を選定した。 右上/吉久にある空き地を歩いて記録した。耕作放棄地を含めて20箇所以上存在した。 下/2023年度のよっさまちづくり会議「企画しヨッサ」。学生と住民のチーム内で企画の立案や活動の目的が話し合われた。



2023年度のよっさまちづくり会議「振り返りしヨッサ」。良かった点、課題点、次年度に挑戦してみたいことなどを話し合い、チーム活動の振り返りを行った。良かった点では「新たな気づきや発見があった」や「交流を深められた」、「外出頻度が向上した」などが挙げられた。課題点では、「メンバーの一部に負担が偏りすぎてしまった」や「子ども達に来てもらえなかった」、「呼び込みや認知が足りず、イベント等への集客が少なかった」などが挙げられた。次年度に挑戦してみたいことでは、「テーブルや看板を設置したい」、「子どもをターゲットとしたイベントをやりたい」などの意見が出た。テーブル・看板づくりといった活動や周知活動については2024年度の活動につながっており、こうした定期的な活動の振り返りを行うことがポイントである。

② 育てる

レイズドベッドを作り、そこに使わなくなった田畑や山からもらった土を入れる畑作りを行いました。さらに、野菜や花を地域の方と一緒に植えたり、収穫したりしました。土づくり、育て方、草刈りなど、園芸の基本から地域の方に教えてもらいました。コミュニティガーデンの初期はサツマイモやジャガイモなど、たくさん収穫できて、手入れも簡単な野菜を育てることがポイントです。

また、2022年度はコンパニオンプランツに挑戦しました。コンパニオンプランツとは、お互いに助け合いながら育つ植物の組み合わせで、共存（共栄）作物とも呼ばれます。野菜と一緒にハーブや花、相性のいい野菜同士を混植することで、香りの成分が虫除けとなったり、根粒菌を駆使して土に栄養を留まらせたりする効果が期待できます。2022年度はサツマイモと赤シソ、トウモロコシとエダマメと一緒に植えました。ただ、悪影響になる組み合わせもあるので要注意です。料理として相性のいいものもあるので、レシピを考えながら、植える植物の組み合わせも楽しめます。いろんなことを想像しながら育てたい植物をみんなで考えながら決めてもいいかもしれません。



上/ニンジンの間引き。よく育っているものに栄養や日光がよくいき渡るように行う。どれを残して、どれを間引くのか教えてもらいながら行った。左下/サツマイモの苗植えを親子や学生と協働で行った。敷き藁は土の乾燥や雑草の成長を防ぐ働きがある天然のマルチ。右下/コンパニオンプランツとしてサツマイモの苗と一緒に植えた赤シソ。赤シソはサツマイモのつるばけを防ぎ、害虫被害を抑える効果がある。



全部で9個のレイズドベッド（W:900mm×D1800mm×H:420mm）に季節に合わせた野菜を育てている。2023年度の夏にコスモスの苗を植えたところ、秋に白やピンク、薄紫といった色とりどりの花を咲かせた（写真右奥）。野菜だけでなく、花も植えることによって場が華やかになった。翌年は少しは範囲を拡大し、花を咲かせている。

③ つくる

2022年度は地域住民と一緒にレイズドベッドを計9つ作りました。工具の使い方や上手くビスを入れるコツを知っている参加者が他の参加者に教えるなどの交流が印象的でした。2023年度はレイズドベッドの再レイアウトから始まりました。また、空き地を住民が普段から立ち寄ることができる休憩所にするを目的に、日陰をつくるためのタープとベンチの制作・設置を行いました。ベンチは学生設計のもと、チームメンバーで協力し、3人がベンチを3台制作しました。2024年度は学生設計のもとテーブルを2台とよしひさえんの看板をチームメンバーで協力し、制作しました。2023年度、2024年度は毎年10月に開催される地域のイベントに合わせて、よしひさえんを休憩所として開放しました。制作したアイテムが活かされ、住民だけでなく、地域外からイベントに訪れた人々も滞在し談笑する様子が多く見られました。

休憩したり、作業ができたり、子どもが遊べたりする空間づくりがポイント。みんなでDIYを楽しもう。パーゴラやジャングルジムなどいいかもしれません。



上/地域のイベントに合わせて、よしひさえんを休憩所として開放するために、活動メンバーでタープの準備を行った。スカウト活動を行っているチームメンバーから紐の結び方やタープの固定方法などを教えてもらった。左下/地域の子もたちと一緒に焼杉のレイズドベッドを制作した。焼杉とは杉板の表面をバーナーで炙って炭化させ、腐りにくくする木材の防腐処理である。右下/よっさまちづくり会議の企画であったさまのこベンチづくりをよしひさえんで行った。さまのこベンチは全部で8台制作した。その後のチーム活動や朝市などで使われている。



2024年度も地域のイベントに合わせて、よしひさえんを休憩所として開放した。2022年度に制作した屋台、2023年度に制作したベンチ、2024年度に制作したテーブルと看板のように、これまで制作したアイテムが勢揃いした空間となった。今後は、常設を前提とした屋根や日陰のある空間づくりや、子どもたちが遊べる遊具なども作っていきとさらに魅力的な場になるだろう。

④ 祝う

採れたての野菜を調理したり、みんなで一緒に食べたり、地域住民に野菜や料理を振舞ったりして収穫を祝いました。ほとんど空き地の状態でバーベキューをしたことが印象的でした。また、子供達と一緒にサツマイモを掘り、その場で洗って焼いて、出来立ての焼き芋をみんなで食べたことも楽しい思い出の一つです。収穫や調理、飲食を共にすることで、参加者の意外な一面や地域のことを知ることができます。

まずはコミュニティガーデンに参加している人が楽しんで活動することが一番ですが、地域の人たちにも楽しんでもらうことが重要です。採れた野菜を地域の人に分けてあげたり、収穫した野菜で料理を作って、振舞ったり。そうした活動を続けることで、地域からも愛されるコミュニティガーデンになっていくと思います。



上/サツマイモの収穫と焼き芋づくりを一緒にしたイベントを行った。親子で会話をしながら、サツマイモを洗い、新聞紙やアルミホイルに包んでいった。左下/秋野菜の種まきを行った後にBBQを開催した。参加者の自宅で作った野菜やお気に入りの料理などを持ち寄った。年齢、性別、町内関係なく会話が弾んでいた。右下/焼き芋づくり・さまのこベンチづくりへの参加者で記念撮影。つくて、食べて、楽しい時間を共有した。



体験農業として、地域の子供達や大学の友人と一緒にダイコンやニンジン、カブなど秋野菜の収穫を行った。普段は農に触れる機会の少ない子供達に、土を触ったり、野菜を収穫したりする機会を提供することができた。収穫した野菜は参加者にお裾分けし、一緒に実りを祝った。収穫した野菜は、地域の公民館祭りに合わせて、提供したり、ポトフの材料として使ったり、単発のイベントで終わらすことなく、繋げる工夫を行った。

⑤ 広げる

地域で開催されている朝市に出店し、収穫した野菜の提供や販売をしました。2022年度は11月によしひさえんで収穫したカブと、それを使ったスープの販売を行いました。また、2024年度は9月によしひさえんで収穫したサツマイモの販売を行いました。地域で育てた新鮮な野菜たちが並び、それを選ぶ地域の方々の様子が印象的でした。

さらに、2024年度はよしひさえんの活動と場所について、多くの人々に知ってもらうことを目的によしひさえん便りの発行を行いました。回覧板や地域の掲示板を見てくれた地域の方々から声をかけてくれたり、イベントに参加してくれたら、よしひさえんの認知につながっていました。

同じコミュニティだけでつながるのではなく、地域の様々なコミュニティと繋がり、運営メンバー以外の地域住民も巻き込んで、一緒に楽しみながら活動することも継続のためのポイントです。

上／朝市に出店し、収穫したサツマイモを販売した。3個100円で販売し、11セット完売した。購入した住民からは「学生が育てたものに価値がある」と喜んでいたり、「次はすぐ食べられるようにしたものも売って欲しい」といった要望が聞けた。下／朝市に出店し、収穫したカブとカブのスープを販売した。朝市を通して、普段は関わりのなかった住民から活動について認知されていたり、応援してもらえたり、活動のモチベーション向上につながった。



よしひさえん便り 第3号

「空き地を何かに活用できないか」
そう考えて、富山大学の学生とよっさまちづくり会議で集まったまちの人が
一緒に空き地「よしひさえん」でお野菜を育てています。

どなたでも参加いただけるイベントを以下の日程で行います！！

植える
農業体験せんまいけ？
9/15(日)
15:00～16:00
@よしひさえん

収穫する
収穫しよっさ
11/16(土)
14:00-16:00
@よしひさえん

食べる
食べよっさ
11/23(土)
10:00-15:00
@吉久公民館

大雨で9/15のワークショップが中止に...、後日チームメンバーと一緒にキャベツ、白菜、大根、かぶを植えました！

これまで育ててきたお野菜(カブ・大根・人参)をみんなで収穫します！！
チームメンバー以外のみなさんもご招待！自分で収穫したお野菜は一味違うかも！

大雨で9/15のワークショップが中止に...、後日チームメンバーと一緒にキャベツ、白菜、大根、かぶを植えました！

よしひさえん

Google Maps
吉久公民館

Google Maps
よしひさえん

どなたでも参加可能です
ご質問は
Instagramまたは
Gmail:
yoshihisa.akich24@gmail.com

〈収穫体験〉
集合場所：よしひさえん
集合時間：14:00
持ち物：汚れても良い服装・軍手・飲み物・タオル

〈野菜販売〉
場所：ひなどり保育園
カーポート下
時間：10:00
(無くなり次第終了)
持ち物：エプロン

〈ポトフ調理体験〉
集合場所：公民館 2 階
集合時間：10:00
持ち物：エプロン
その他：出来次第無料配布も行います！

よしひさえん便り 第3号

これまでの活動をご紹介します！！

お野菜を植えるための準備(草刈り) 5/15

夏野菜を植える 5/22

きゅうり・トマト・なすを植えました。
地域の方々、そしてメンバー以外の学生がお手伝いしてくれました。

お野菜について学ぶ 6/30

チームメンバーが先生となり、これから野菜を育て収穫していく中での手入れの知識などを教えていただきました。

人参を植える 7/14

土づくりをした後、人参の種まきを行いました。
秋冬野菜の中でも人参は一早いです！

机と看板作りワークショップ 8/23

空き地をもっと居心地の良い場所にするために机を、よしひさえんの場所をわかりやすくするために看板を制作しました。

夏野菜の始末と土づくり 9/8

朝市にてさつまいもの販売 9/15

たくさんの方に買っていただき、無事完了しました！

秋冬野菜の植え付け・種まき 9/18

キャベツ、白菜、大根、かぶを植えました！

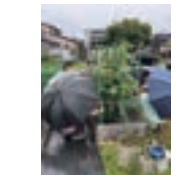
さまのごアート 10/20

空き地を休憩所としお茶の提供を行いました！
またよしひさえんだよりを配布し、訪れた人に普段の活動やイベントについて知っていただく機会となりました！

日々の収穫・手入れ

チームメンバーで曜日ごとに当番を決め、水やりや草むしり、虫取り同時に収穫や手入れも行っています。
収穫した夏野菜は、その日の当番が買います！

毎日水やりや虫取りなどの手入れをしながら大切に育てています！
お散歩など思い出した際にふらっと足を運んで活動を見守ってくださると幸いです！



よしひさえんの場所と活動の認知拡大を目的としたよしひさえん便り第3号。イベントへの参加者を募集することこれまでの活動内容がまとめられている。

3年間の活動年表

2022年度から2024年度までのよしひさえんの活動を紹介します。

●: 探す・考える ●: 育てる ●: つくる ●: 祝う ●: 広げる



▲当初の空き地

3・4月

- 土地探し
- 子育て世代へのヒアリング
- ユニット屋台制作



▲サツマイモの苗植え

6月

- レイズドベッド制作
- 苗植え(サツマイモ/トウモロコシ)
- 種まき(エダメ/赤シソ)
- 土づくり



▲耕作放棄地の田んぼから土運び

8月

- 土運び



▲サツマイモの収穫

10月

- モバイル屋台「えん」制作
- 収穫(サツマイモ)
- 焼き芋づくり
- さまのこベンチづくり



▲制作したコンポスト兼資材BOX

3・4・5月

- コンポスト兼資材BOX制作・設置
- まち歩き
- 草刈り



▲有志学生とレイズドベッドの移動

7月

- 第2回定例会議
- 草刈り
- 種まき(ニンジン)
- 苗植え(カボチャ/コスモス)
- 水やり当番活動開始
- レイズドベッド移動・レイアウト変更



▲ダイコンの種まき

9月

- よっさまづくり会議「準備しヨッサ」
- 種まき(ダイコン)
- 苗植え(ハクサイ)
- ベンチ制作
- タープ仮設



▲収穫祭にて野菜の提供

11月

- 第5回定例会議
- 収穫(ダイコン/ニンジン/カボチャ)
- チラシ作成・配布
- ポトフと野菜の提供



▲草刈り

5月

- まち歩き
- 草刈り
- 土づくり
- 苗植え(ナス/キュウリ/トマト/サツマイモ)



▲第2回定例会議

7月

- 水やり/夏野菜収穫の曜日当番開始
- 第2回定例会議
- 苗植え(ネギ)
- 種まき(ニンジン)
- 草刈り
- 第3回定例会議



▲サツマイモの収穫

9月

- よっさまづくり会議「準備しヨッサ」
- 収穫(サツマイモ/ネギ)
- 夏野菜の後始末/土づくり
- よしひさえん便り第2号発行
- 朝市出店(サツマイモ)
- 苗植え(ハクサイ/キャベツ/カブ/ダイコン)



▲ポトフの調理体験

11月

- 第5回定例会議
- よしひさえん便り第3号発行
- 収穫(ニンジン/カブ/ダイコン)
- 苗植え(バンジー)
- ポトフの調理体験と提供
- 野菜販売

2022

2023

2024

5月

- 土運び
- レイズドベッド試作



▲栄養豊富な山の土運び

7月

- レイズドベッド制作
- 収穫(トウモロコシ)
- つる返し(さつまいも)
- 草刈り



▲レイズドベッドの制作

9月

- 土づくり
- 草刈り
- 種芋植え(ジャガイモ)
- 種まき(ニンジン/カブ/タマネギ)
- 苗植え(ハクサイ)
- バーベキュー



▲ハクサイの苗植え

11月

- 朝市出店(カブ/カブのスープ)



▲朝市で販売したカブのスープ

6月

- よっさまづくり会議「企画しヨッサ」
- 第1回定例会議



▲よっさまづくり会議での企画づくり

8月

- 第3回定例会議
- タープの束石の設置
- ベンチ試作



▲学生によるベンチの試作

10月

- 第4回定例会議
- 休憩所として開放/お茶の提供



▲休憩所として開放し、来訪者と談笑

12月

- よっさまづくり会議「振り返りしヨッサ」
- 収穫(ハクサイ)



▲収穫したハクサイ

6月

- よっさまづくり会議「企画しヨッサ」
- 第1回定例会議
- 野菜講習会
- 収穫(ナス/キュウリ/トマト)



▲収穫したトマトとキュウリとナス

8月

- よしひさえん便り第1号発行
- 看板/テープルづくり



▲テーブルづくりと看板づくり

10月

- 第4回定例会議
- 休憩所として開放/お茶の提供
- よしひさえん便り号外発行



▲休憩所として開放し、来訪者と談笑

12月

- よっさまづくり会議「振り返りしヨッサ」
- 収穫(ハクサイ/キャベツ/カブ/ネギ)



▲ハクサイの収穫

よしひさえんと屋台

近年、空き地で屋台を展開し、まちの賑わいを創出する取り組みが増えつつあり、空き地の利活用の検討や実践において仮設性を持つ屋台が有効だと考えました。また、デザインや特性が機能している屋台や什器は、その記号性、アイコン性から場のコミュニケーションを誘発する装置として、よしひさえんの活動に有効ではないかと考え、地域住民のコミュニケーションを誘発することを目的とした屋台を2台制作しました。

ユニット屋台は氷見杉（一部合板）を活用した、11種の部材、計25で構成され、工具を使わずに組み立てることができます。朝市に出店する際やよしひさえんを休憩所として地域に開放する際に活用しました。使い勝手がよく、アイコンとしても機能していました。

モバイル屋台「えん」はホームセンターで購入できる材料と地域で処分予定だったリアカーを活用した屋台です。リアカーによる移動性と場の展開性を持ち、テーブルとして使えます。よしひさえんでの談話の場や朝市での飲食スペースとなり活躍しました。



上／焼き芋・さまのこベンチづくりの際に参加者がモバイル屋台「えん」を囲んで談笑していた。元家具職人の参加者にカンナがけをしてもらうなど、参加者のスキルを活かすアイテムにもなっていた。下／モバイル屋台「えん」の展開の流れ。①移動・展開前の状態。②リアカーの脚に板、タイヤにタイヤ留め用の石をかませる。③天板受け用鉄パイプを4本差し込み、天板を展開させる。④天板に屋根支柱用の鉄パイプを4本差し込む。⑤屋根支柱用の鉄パイプと屋根用鉄パイプ：横をTジョイント金具で固定する、⑥屋根用鉄パイプ：横と屋根用鉄パイプ：縦をパイプクロス金具で固定する。⑦屋根用タープを屋根用鉄パイプに紐で縛りつける。⑧椅子等を配置して完成（展開後の状態）



左上／収穫したカブとカブのスープを朝市で販売する時にもユニット屋台を活用した。お手製の暖簾をかけることで場の雰囲気やアイコン性が高まった。3段階の高さの違う受け材と横に受け渡す材を組み合わせることで、販売台と作業台を作り出せることができる。右上／地域のイベントに合わせて、よしひさえんを休憩所として開放した際も活用した。別の活動のチラシや手ぬぐいが飾られるなど、よりアイコン性や広告塔としての役割を高める使い方みられた。下／休憩所として開放した際にユニット屋台を介して来訪者にお茶を提供した。テーブルや展示台として活躍した。



卒業研究：多世代のネットワーク形成に向けて

本稿では、2022年度に私が行った研究から、よしひさえんが人的ネットワーク形成の場になる可能性について考えてみたい。

本冊子の冒頭でもふれたが、吉久では、地域コミュニティの希薄化、空き地の増加に伴う生活環境の悪化といった課題がある。しかし、通りに面した空き地は、まちづくり活動を実践する上での視認性が高く、多様な使い方を許容できるため、人的ネットワーク形成の場になりうるのではないだろうか。

近年、コミュニティガーデンがオープンスペースを活用した多世代交流の場とし



図1 「よしひさえん」のフロー

て注目されており、園芸や野菜販売などの「食」に関する活動が世代を超えたコミュニケーションを促していると考えられる。また、多世代ネットワーク形成においては、園芸活動を中心とする、継続的な世代間交流プログラムの開催や多種多様なイベントへの参加の重要性が指摘されている。以上のことから、空き地を活用し、「食」をテーマとした多種多様なイベントを内包するプログラムを継続的に実施することは、多世代ネットワーク形成において有効であると仮説を立てることができる。

そこで、園芸、調理、飲食、振舞、工作の5つの活動を「食」と定義し、これらに関する多種多様なイベントを継続的に実施するプログラム「よしひさえん」を試行的に実践した(図1)。ここに、「よしひさえん」の多世代ネットワーク形成に関する効果の検証を紹介したい。

「よしひさえん」の実践が形成した人的ネットワーク

アンケート・ヒアリング調査の結果をもとに、「よしひさえん」で形成された人とのつながりを図2のように示す。ここから、対象者全員が、自分以外の年齢層の人と交流、もしくは初めて見た人と出会う機会を得ていることがわかる。また、㉑、㉒、㉓のように対象者の「初めて見た人」が集中した参加者がいたことから、「よしひさえん」は新たなコミュニティからの参加者を募ることができる可能性のあるプログラムであることが考えられる。さらに、対象者の「初めて見た人と交流した」、「初めて見た人」の人数を整理したところ、同じ年齢層での新たな出会いや交流があまり見られなかった一方で、異なる年齢層での新たな出会いや交流はある程

度みられた。「初めて見た人」の間での多世代交流がみられたことから、「よしひさえん」が多世代のネットワークを形成するきっかけになる可能性が示唆された。

多世代ネットワーク形成に向けた効果

対象者同士がどのイベントで初めて交流したのかに着目したところ、㉑は3種のイベントで3人と初めて交流していた。これは、多種多様なイベントを継続的に行った結果、新たにできたつながりであり、単発のイベントでは生まれる可能性が低いつながりであると考えられる。また、園芸バーベキューというイベントにおいては2つの新たなつながりがみられた。つながりが生まれた対象者の園芸バーベ

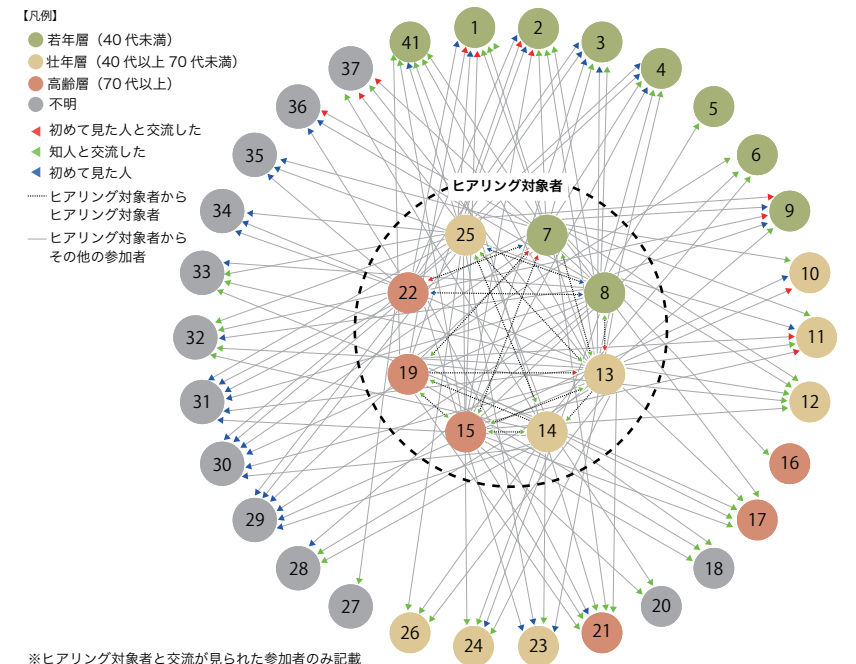


図2 「よしひさえん」の実践が形成したネットワーク

キューにおける参加内容をまとめた結果、調理や飲食など、同じ活動を多く行っていることがわかった。ここから、複数の活動を含むイベントを開催することで、交流する機会が増え、新たなつながりが生まれることが考えられる。同様に参加動機についてまとめた結果、参加動機が異なる人同士に新たなつながりが生まれていた。さらに、「畑に関心があるから」(園芸)や「BBQに関心があるから」(飲食)のように、異なる「食」に関する参加動機で、かつ年齢層が異なる対象者がイベントに同時に参加していた。ここから、園芸や飲食のような様々な「食」の活動をイベントが内包していたことにより、多様な年齢層の参加者を受け入れる余地が生まれていたと考えられる。また、複数の年齢層で「子どもと一緒に参加できるから」や「他の人との交流のため」が共通した参加動機としてみられた。ここから、参加者が潜在的に他の人との交流を求めている可能性があり、「よしひさえん」が、子どもと一緒に参加できる内容であったことが、参加を誘発したと考えられる。以上より、「よしひさえん」において、多種多様なイベントを継続的に行ったことや、複数の「食」の活動をイベントが内包していたことに加え、子どもと一緒に参加できる内容であったことが多世代の参加・交流機会を創出しただけでなく、参加・交流を促進したと考えられる。

本稿のまとめ

このように「よしひさえん」の実践から、「食」をテーマとした多種多様なイベントを内包するプログラムを継続的に実施することによって、①多様な人の参加・交流機会の創出に効果があったこと、②多様な人の参加・交流を促進する効果があったこと、③多世代ネットワーク形成へのきっかけになる可能性を考察した。「よしひさえん」は人と人との繋がりを生み出す場になる活動といえるのではないだろうか。

修士研究：コミュニティガーデンの価値とその創出要因

本稿では、2023年度から2024年度にかけて私が行った研究から、コミュニティガーデン（以下、CG）の価値とその創出要因について考えてみたい。

CGが健康、幸福感に対し有益といった参加者個人（以下、個人）に対する価値や、コミュニティでの主体性、連帯感の醸成などの地域に対する価値を提供していることが明らかになっている。しかしながら、CGによって生まれる価値を個人と地域の両面から網羅的に把握し、その価値を生み出す活動や体験といった要因を詳細に分析した研究はみられない。

国内の空き地を活用したCGの事例研究には、NPO法人や地域住民、ボランティアが運営している事例を取り上げたものはあるが、それらの事例は都市部や都市近郊の事例であり、地方部の空き地を活用したCGの事例研究はほとんどみられない。

また、近年、域学連携という活動が注目されている。域学連携は、地域にとっては知識・情報の活用、地域住民の人材育成などが期待され、大学にとっては地域での交流や実践を通じた教育効果などが期待されている。特に地方部においては、まちづくりの担い手不足が深刻化する中、CGにおいても域学連携による学生と地域住民との協働は新たな価値を創出する可能性を有する。そのことから、地方部のCGにおける学生と住民の協働によって創出する価値を明らかにすることで、その有効性を明らかにすることができる。

さらに、住民を代表してCGの管理を担うコーディネーターにおける役割の認識の違いによって、そのCGで行われる活動が異なることが明らかとなっている。CG

で行われる活動が異なることにより、その活動の創出価値も異なることが推察されることから、運営者の役割の違いによって、創出価値が異なると考えられるため、CGにおける役割も価値創出の要因になりうる。

以上より、本稿では学生と住民の協働による地方部の空き地を活用したCGを対象に個人と地域に対する価値を網羅的に解明し、その創出要因も分析した。具体的には、よしひさえんを運営している11名に対してのヒアリング調査と参与観察から、SEM理論（経験価値、つまり、「消費者の購買行動に価値ある経験が付加されることで、いかに消費者の満足感や購買意欲が高まるか」を分析するためのフレーム）を用いて個人と地域に対する価値を網羅的に解明した。さらに、価値の創出要因や役割との関係を分析した。結果として、1.よしひさえんでは35種の価値と15種の創出要因があり（図1）、協働や交流の機会創出や仕組みづくりが重要である、2.学生との協働は住民の自己成長を促す、3.イベントの開催や協働機会の創出は、当番活動のみの参加者に楽しさや関係性向上などの価値を提供できる、4.多様な役割を参加者間でバランス良く担うことがCGの継続につながる、5.学生の場所への愛着を醸成する、という5点を明らかにした。本研究により、今後人口減少に伴って増加が見込まれる地方部の空き地の有効な活用方法として、学生と住民が協働し、農的活用を行うことの有効性が示唆された。

このようにCGには肉体的、精神的、社会的に人々の暮らしに良い影響を与えていることがわかる。人々の繋がりが希薄化し、また、パンデミックや頻発する自然災害で不確実性や不安定性が増す地域社会において、CGは人々に豊かな暮らしをもたらす活動といえるのではないだろうか。

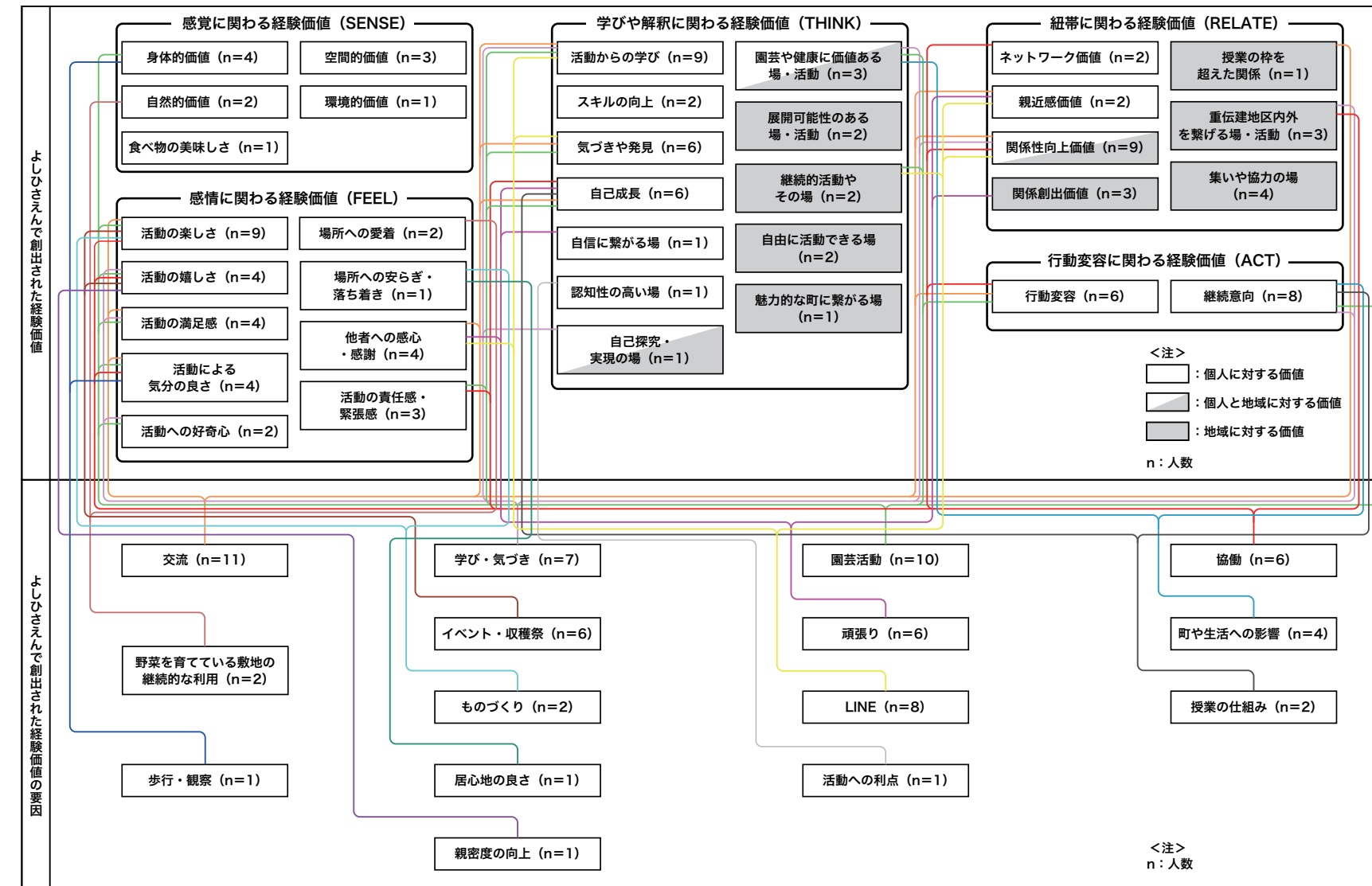
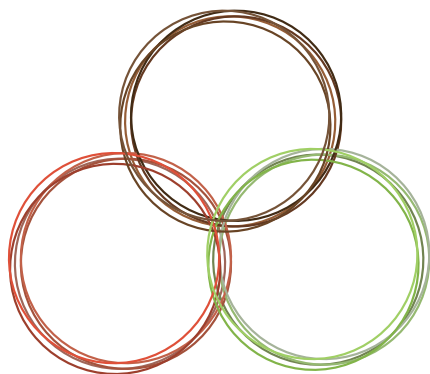


図1 よしひさえんで創出された経験価値とその要因



よしひさえん ー学生と住民が空き地を活用して生まれたコミュニティガーデン 2022-2024ー

発行日 | 2025年1月

発行 | 富山大学藪谷研究室

編集・デザイン | 重山隼人

写真 | 藪谷研究室 活動メンバーのみなさま

印刷 | 株式会社グラフ

